録されている。流布本大同類聚方にもムセ病という病名が見えている。また、和名抄は哽咽にムスと訓をつけ「食塞ガル也」と説明している。

大痢、痢結という言葉は痢を便という意味に用いており、大痢は大便、痢結は便秘のことである。

（七沢リハビリテーション病院）

新確認の慶長古活字版『黄帝秘要良方』

○白石尚基
原中瑠璃子・小曽戸洋

活字印刷は宋代に中国で発明され、西漸してグーテンベルグの活字へとつながったことは普く知られるが、当の中国では定着するに至らなかった。しかしそれはまた東漸して朝鮮に定着した。朝鮮古版には活字本がすこぶる多い。文禄慶長の役で、秀吉の武将らはかの地の活字印刷機具を戦利品とし、職人までもつれ帰ったから、たちまちわが国では活字印刷が盛行した。慶長年間に出版されたこれらの活字本は慶長古活字本と称され、出版文化史上極めて珍重される。

川瀬一馬氏（『古活字版の研究』）は活字開版の初期における医師の活動は目覚しいものであったと指摘する。医学書は実用書である。古活字版中に占める医書の割合は高く、

慶長年間には数十種に及ぶ古活字版医書が出版された。これらが医学知識普及の原動力となったことはいうまでもなく、後の医学文化に与えた影響は計り知れない。

古活字版の書誌については、従来詳細な研究がなされているが、演者らはこのたび学界未知の新種本の存在を見い出した。医学文化史上はもとより、印刷文化史上においても貴重な資料である。ここにその概要を報告する。

当該資料は日本大学医学部図書館に所蔵される『黄帝秘要良方』なる書である。同館刊『古医学資料目録』(一九八四)には古活字版であることは記されていない。一方『国書総目録』(岩波)を検索すると、「辨疑書目録による」として本書の書名を挙げるのみである。すなわち『辨疑書目録』は宝永七年(一七一〇)に刊行された中村富平の所著に拠るもので、本書の現所在は知られていないことがわかる。また川瀬一馬氏『古活字版の研究』にも未収である。よって新種の古活字版と認めた。

なお、『国書総目録』に当該本の所録がないのは、これが日本大学医学部図書館蔵書ではあっても、富士川文庫本ではなく、内山孝一博士旧蔵本にかかるからである。もし富士川文庫本であったとすれば、昭和二十一年石原明博士手録の目録に基づいた同三十四年東京大学史料編纂所の転写本により、『国書総目録』に録入されていたはずである〔内山博士の薫陶を受けた石原博士が本書の存在を知っていたとしても不思議はないが、石原博士の「日本中世古版医書年表」(二)『日本医史学雑誌』(六巻一号)もこれを載せない〕。

次に書誌学的形態を示す。

四ツ目針眼装。一冊。全二三葉。古活字。匡郭約二二・二cm。毎半葉一〇行、行一七字。片仮名を混ずる和文。

第一葉は整版で、前半葉には「神農皇帝」の四字を大刻。後半葉には梵字二字と「円弥」の章を刻し、活版で「三皇徳各四三皇、中有人間真薬王」と重刷する。最終前半葉には「右一冊弟衆中為相伝之顕愚胸紙数二十三枚染禿筆者也／時慶長戊申仲春　円弥」という刊記があるから、慶長十三年(一六〇八)の刊である。第二葉首行に「黄帝秘要良方」とあり、次いで一三七字の序文がある。

内容は脈診や民間療法などが一五項目にわたり雑然と述べられている。その項目を記しておく。①医請慎保身法、

②診脈之辨列、③四知論、④五蔵六府所出図、⑤栄衛分別、⑥男女辨、⑦四脈有力無力、⑧二十四節脈歌、⑨金瘡付切疵・衝疵・矢疵・打疵、⑩月経不調、⑪胎前、⑫産後、⑬大血之道、⑭薬味辨、⑮諸銘。

本書は奈須恒徳（一七七四～一八四一）の旧蔵にかかることが、その蔵書印と識語によって知れる。すなわち巻首巻尾に「久昌院蔵書」印二顆、巻首に「奈須恒徳」印一顆があり、さらに巻首に恒徳の自筆で次のような識語がある。

「元和の頃山本玄仙万外集要小切紙（元和五年序、寛永十九年刊）ヲ著ス。序云因和国無双之外科云々。和国無双ノ外科トハ此書ヲ著シタル円弥ノコトナルベシ。小切紙ニ所記アカカワノ方全ク此書ニ本ヅキタル也。此書発端ニ全九集ノ文アリ（前述の一三七字の序文をいう）。又巻末ニ能毒ヲ見ルベシト云、病症ニヨリ銘ヲウツト云コト一溪（曲直瀬道三）学ニシテ円弥亦仏氏タルコト明ケシ。但其人ノ郷里氏係ヲ知ラズ。後日求録ヲ待ツ。文化十四年丁丑二月二十日奈須恒徳志」「辨疑書目録、植字部、黄帝秘要良方一巻、円弥作、養生ノ書ナリ」。

著者円弥（び）についてはいま知るところがなく、今後の調査に期したいが、ともかく本書は、慶長古活字版医書の孤本として医学文献史の一端に著録されるべき新資料と考える。

（日本大学医学部）